

# 式内青渭神社の鎮座地について

神 尾 明 正

## I. はじめに

### II. 従来の研究

### III. おもな論社と鎮座地

- (1) 調布市深大寺の青渭神社
- (2) 稲城市長沼の青渭神社
- (3) 青梅市沢井の青渭神社

### IV. 青渭神社の歴史地理

### V. 残された問題

## I. はじめに

文献史学の畑から育って来た研究者達が「条里制の歴史地理学的研究」とか「式内社の歴史地理学的研究」とかいう題で書いたものがどう見ても地理学的研究ではなかったりしてもあまり気にもならないが、本誌に掲載されているような論文が、地理でも歴史地理でもなく、歴史か経済地理かその他の研究成果とみられるもの多くなって来たことは、近来全くやりきれない気持である。

いうまでもなく人類の歴史は、今はやりの言葉でいえば、自然の歴史と同時進行である。仮りに条里制が大化改新直前頃施行されたとすると、当然いわゆる縄文海進(われわれのいう縄文~弥生海進)の海が海退の相に移行してから数百年の経過の間に、海退にともなう隆起海岸平野の形成、河川の上流からは大量の土砂の供給のあるような湿潤な環境がなければ、いくらクーデターで中央集権の実をあげたといっても、全国的に条里制施行などできなかった

はずである。

われわれが今歴史地理と考えているものを平たくいえば、地形変化・気候変化・植生の遷移などの自然史と人類の歴史とを、同じ組板の上のせて料理しようという試みであるといえる。人類の歴史をも含めた自然史という意味で全自然史ということもできる。このような歴史地理の勉強は、個人の一生ではとても手におえるものではないことはわかりきってはいるが、関東大震災を体験した小学校5年生頃から、はっきり意識して勉強してきたつもりである。そういうつむりの歴史地理の小さな実験として、全国のどこにでもみられるような小さい式内社である青渭神社をとりあげ、約15年以上の野外作業をおこなって来た。

神道には、経文のようなものもなく、祭祀の儀礼なども親の神主から子供の神主へと口伝で伝えられてゆくもので、文献がないのが普通である。偶然多少の文献があったとしても、戦乱で焼失したり、地震による建物の崩壊のあとの雨もりで朽ち果ててしまったりして、かなり大きな神社でも文献資料はきわめて少ない。従って文献史学からのアプローチには限界があり、どうせ文献に頼れないのなら、自然環境・人文環境をダイナミックにからめて考える歴史地理学からのアプローチも、それなりに意義があるものといえよう。

## II. 従 来 の 研 究

従来の研究としては、江戸時代以来の神道史学の

多くの文献類として『武蔵名勝図会』『新編武蔵風土記稿』『江戸名所図会』などの地方誌類や、新しくは菱沼勇の著作<sup>1)</sup>、『式内社調査報告』<sup>2)</sup> などもあり、いずれも論社のあることにはふれているが、正社を決定するまでには至っていない。

### Ⅲ. おもな論社と鎮座地

#### (1) 調布市深大寺の青渭神社

深大寺の門前の道を東へ坂を登りつめたところ、T字型に突き当たった道を左へ曲ると(図1)、三鷹駅へ通じる道路が写真1のように見えてくる。この道路の前景も遠景も同じく武蔵野台地の面であるが、写真でよく見えるように、中景の道路が2～3m低くなっている。この一番低くなっているところの

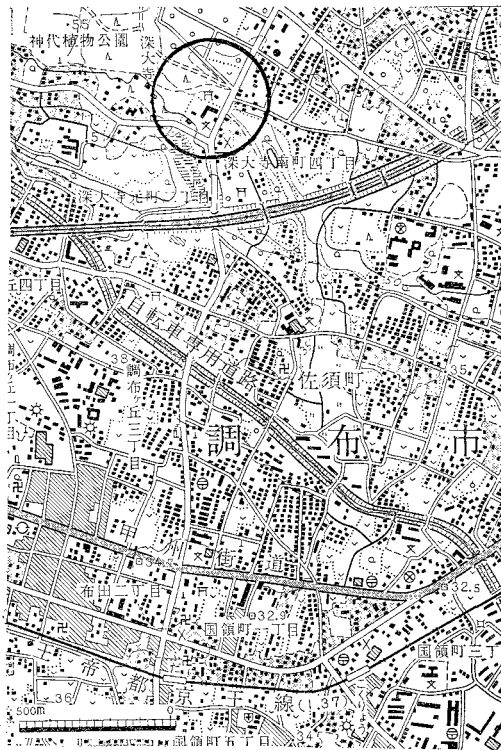


図1 ○印の中心にある神社の記号が、深大寺の青渭神社。国土地理院発行1:25,000地形図「溝口」の一部を使用。

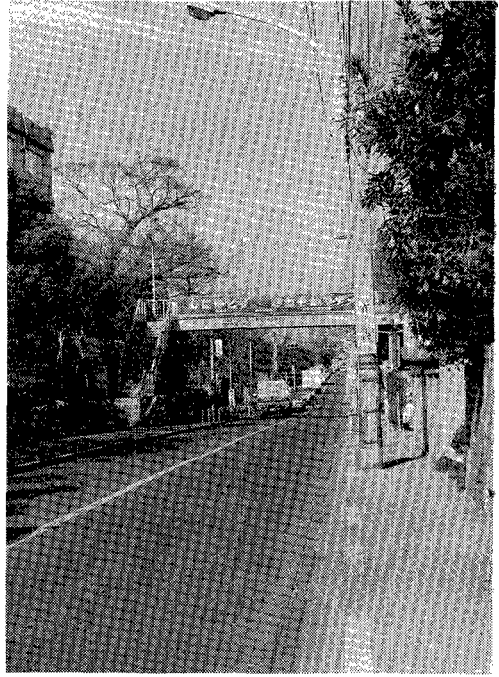


写真1 深大寺の青渭神社の鎮座地前の道路。ほぼ北を望む。御神木のケヤキの大木の梢が見える。

向かって左側、すなわち道路の西側、海拔約50m～51m<sup>3)</sup>、約40m×60mの広さのところは現在の青渭神社の境内で、社殿・社務所・御神木などがあるが、社叢らしい社叢はみられない。

図1の下3分の2はいわゆる立川段丘で、野川が北西～南東方向に流れ、これと同じ方向に比高約15mのいわゆる国分寺崖線がその北東側にあり、中央自動車道が青渭神社の約400m南でこの崖線を切っている。その中央道が少し曲っているあたりから青渭神社にかけて、北から北西方向に、幅約50m深さ約6mのU字谷が武蔵野台地の南縁を刻んでいる。この細長いU字谷の谷頭に近く池などのあるあたり(図1)は都立農業高校の農場となっており、自然がもっとよく残っていた時代には、この谷頭には武蔵野砂礫層からの豊富な湧水があったはずである。この付近の表層地質は、上から広義の黒土約1m、

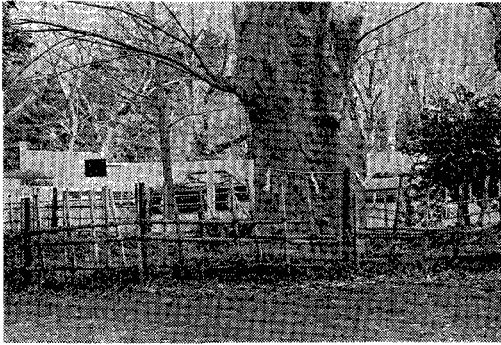


写真2 深大寺の青渭神社の御神木の大ケヤキの根元。ほぼ南東を望む。

狭義の関東火山灰層約5m、武蔵野砂礫層約2mで東京層に達している。国分寺崖線の下や武蔵野台地を刻んだU字谷の底で見ることのできるのは武蔵野砂礫層までで、東京層は見えない。

武蔵野台地を刻む樹枝状の谷の谷頭にみられる杓子型の地形を、川崎逸郎は先導谷<sup>4)</sup>、筆者は杓子型谷頭<sup>5)</sup>と呼んでいる。武蔵野台地上の方々で見られるくぼ地形とU字谷の谷頭とがつづいてしまったものが、この杓子型谷頭である。くぼ地形については『武蔵野市史』にややくわしくのべておいたが<sup>6)</sup>、このものは分類からいうとその1m50型である。

この谷頭は、写真1の道路の向う側すなわち東側になるが(図1)、農業高校の門を入ったすぐ南側に、山林と竹林で下生えも密で写真効果もないので写真には省いたが、幅約20m高さ約5mの主滑落崖や谷底に近いところでは副次滑落崖もみえ、はっきりした地すべり地形がある。この円弧型地すべりの頭部から冠部にかけてが杓子型谷頭に当たっている。写真2の中景にみえる道路をへだてたブロック塀のところまで滑落崖がせまっており、道路はもちろん御神木のあたりまで今にも滑落しそうである。歴史時代を通じて滑落崖の後退がつづき、きわめて不安定な地形であったといえる。絵には絵そらごとということもあるのはわかっているが、『江戸名所図会』の挿絵にある道路の路肩の曲り方が弧をえがいてい

るのをみると、いかにも円弧型地すべりの滑落崖の上縁の形を思わせるものがある。

写真2で御神木は、約1m50cmの深さの穴の中から生えているように見えるが、実はまわりの台地上からの土が匍行(creep)により動いて来て、もし木の根を埋めてしまうと木が枯れてしまうので、根のまわりだけ掘りひろげて、こういう形になってしまったものである。

円弧型地すべり・匍行などの地形変化のおこった時代も、古代的というよりも中世・近世的である。神道の研究者たちがよくいう古社のたたずまいというようなものも、この鎮座地からは感じられない。

## (2) 稲城市長沼の青渭神社

図2をみてわかるように、この付近の多摩川の右

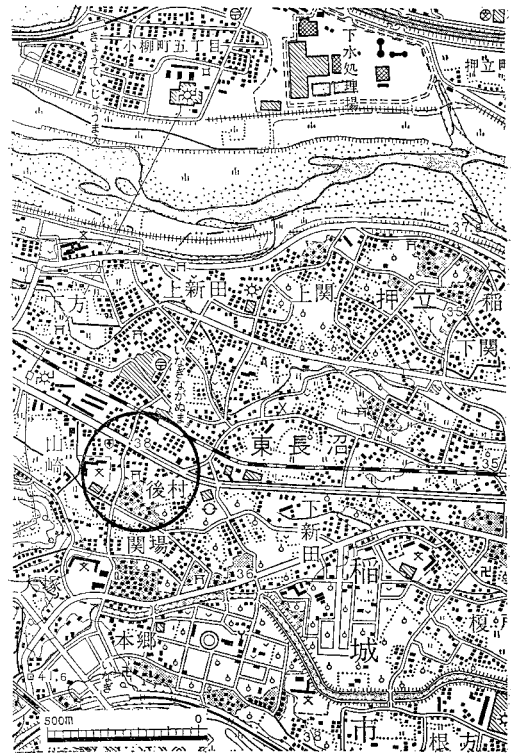


図2 ○印の中にある神社の記号が、長沼の青渭神社。国土地理院発行1:25,000地形図「溝口」の一部を使用。

岸では、水路も道路も集落の並び方もすべて多摩川の流路の方向すなわち東西方向になっている。終戦直後ぐらいまでは建物がなくてよく見通すことができたが、集落のあるところは氾らん原上の砂堆や礫堆に当たっている。水路になっている部分は、その上を乱流していた網状の流れが約50cmぐらいの下方侵食をおこなってできた、ごく浅いU字谷である。集落やそれらを連ねる道路は、その東西に細長い侵食残りのごく低い段丘上に立地している。約100年前の明治15年に測量されたいわゆる迅速図の「府中駅」図幅をみても、約150年前の『武蔵名勝図会』や『江戸名所図会』にえがかれているこの付近の景観をみても、そのことはよくわかる。長沼の約3km上流では新田義貞の鎌倉攻めの時の分倍河原の合戦が戦われ、その戦死者を葬った塚は、長沼付近の氾らん原に対比される氾らん原上に今も残っている。

長沼の青渭神社付近の地形はごく中世・近世的で、鎮座地には社叢らしい社叢もなく、古社のたたずまいも感じられず、論社の一つではあるが、正社とはいかにも考えにくい。

### (3) 青梅市沢井の青渭神社

JR青梅線の御岳<sup>みたけ</sup>駅から一駅手前の沢井駅にかけて、図3に実線でかいてある旧道が、多摩川の左岸の海拔240mあたりを通過している。小さい沢を2つ渡り、図3にもある少し大きい沢の大沢に沿って急坂を約400m登った海拔約300mのところには沢井の青渭神社の拝殿があり、里宮とも呼ばれている。さらに破線の道を北へ約2km登った海拔756mの惣岳<sup>そうがき</sup>山の頂上に本殿があり、現在おこなう祭祀はここで行なわれている。本殿より水平約200m垂直約60m下の海拔約695mあたりに、いくつかある末社の筆頭である真名井神社の小祠がある(写真3)。戦前からよい水場として知られており、里宮のある大沢の上流の谷頭の一つとなっている。

写真4は、図3の地形図からちょうど東へ外れた

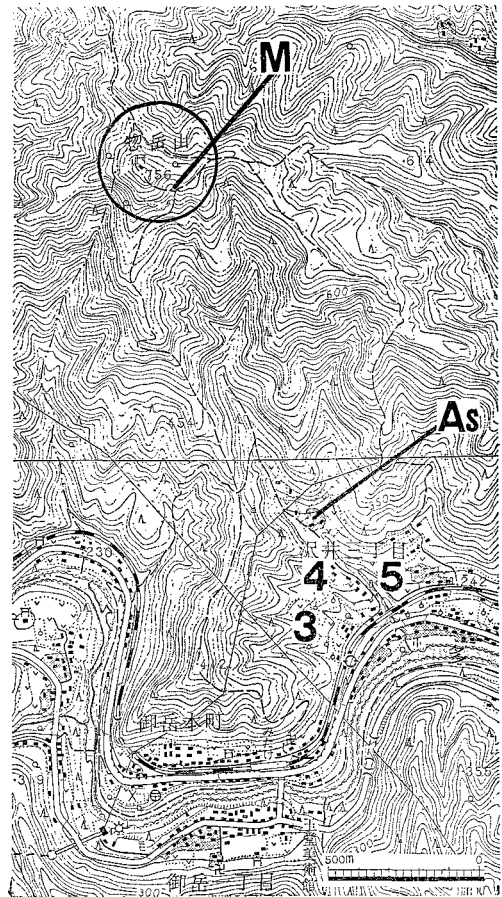


図3 ○印の中にある神社の記号が、沢井の青渭神社の本殿。Mは末社真名井神社、Asは青渭神社の里宮、数字の3・4・5は、それぞれT-3・T-4・T-5の遺跡の大体の位置。国土地理院発行1:25,000地形図「武蔵御岳」の一部を使用。

多摩川右岸海拔約240mの地点からうつしたものであるが、青渭神社の本殿と真名井神社とがある惣岳山の頂上の地形は、奥多摩のこのあたりのいわば晩幼年期から早壮年期に開析された山地の上に、突こつとしてそびえている残丘(monadonoc)であることがわかる。このあたりの基盤の地層は、戦前から秩父古生層ということで教えられてきたが、最近ではチャートの中の微化石コノドントや石灰岩の中の放散虫や紡錘虫の化石の細かい研究とプレートテクトニック的なモデルを考えあわせて、古生代の石灰

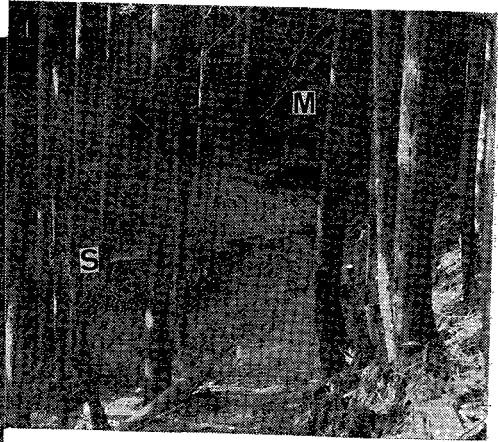
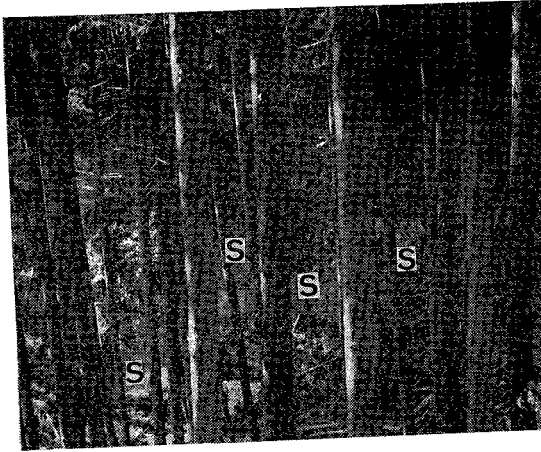


写真3 真名井神社の社前。Mは真名井神社の小祠，Sはチャートの鏡肌。ほぼ北西を望む。

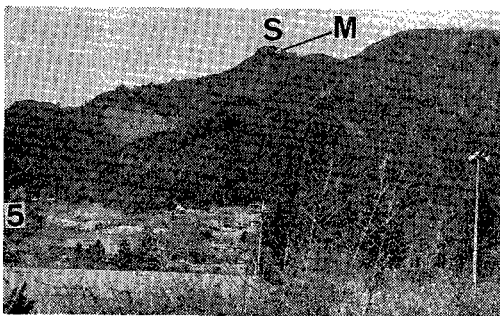


写真4 多摩川の右岸から見た惣岳山。Sは惣岳山の頂上，Mは真名井神社，5は遺跡T-5。ほぼ北西を望む。

紀あたりから中生代の白亜紀にいたる間の幅広い時代の地層であることが知られて来た<sup>7)</sup>。惣岳山のような残丘も正規侵食だけの侵食により残った残丘ではなく、オリストストローム (oliststrome) といわれるこれまで考えられなかったような大規模な海底地すべりなどで、径数百mもあるような大きい岩塊が、礫岩の中の礫のような形で堆積して来たものと思っただ方がいいことになった<sup>8)</sup>。そういったものが原始神道期の祭祀対象となり、御神体山として祭られたものである。

写真4でわかるように、頂上から少し下ったとこ

ろ(写真3)にある真名井神社の横には、きわめて硬いチャートの岩塊中の断層のすべり面である鏡肌 (slicken-side) が露頭となっている。その面の走向傾斜は $N20^{\circ}E68^{\circ}SE$ 、面の大きさは高さ約4m長さ約25mである。写真3の向かって左端は高さ数十mの切り立った岩盤で、このチャートの大岩塊がかなり青みがかかった青灰色であることは、青渭神社の青の字のついたわけを思わせるのに十分である。原始神道期はもちろん恐らく数十年前頃までは、この鏡肌も、文字どおり物がうつるように青く光りがやいていたであろう。それは京都衣笠山山麓の「鏡石」も、現在でこそ風化して何もうつらなくなっているが、筆者の学生時代には『都名所図会』にあるようによくうつったからである。

高さ約2m20cmの小祠は、現在では湧水量の少ないしみ出し(seepage)の上に建てられている。表土をかぶっているため断層面を掘り出して確かめることはできないが、地形からみると、ここは数方向の断層面の寄っている断層角に当たっており、いかにも湧水のありそうな位置である。青渭神社の渭の字の意味は大変わかりにくい<sup>9)</sup>が、この湧水についてもであろう。中国でも、「渭水は清く、……」とい

う言葉がある。

神道の研究者たちは古社のたたずまいの条件として、付近に巨岩や沼などの特殊な自然物があるほか、そこが交通路に当たっていることを考えている。ちよどここを、多摩川の谷から、奥武蔵の山から飯能へと流れでる名栗川の谷へと越える歩きやすい山道が通っていることは、この真名井神社の小祠付近を沢井の青渭神社のもっとも溯れる元社地と考えてみてはどうかということが出来る。ただし、東国の式内社を考える場合、畿内の大きい式内社を頭において考えてはいけない。例えば三宅島では、大きい楠の根元に径20cmほどの海礫1個が置いてあるだけの式内社も現存するからである<sup>9)</sup>。

### Ⅲ. 青渭神社の歴史地理

あえて平たくいえば、約1万年前頃、立川ローム層の最上部のカロ（かたいローム）が、大体现在の地形に近い当時の山地地形のところどころに堆積しながら一部再積して当時のA層（残積表土）とまじってしまったものが、例えば里宮から惣岳山へ登る図3に破線でえがいてある参道の海拔420~490m付近と海拔570m付近にもみられる。狭義の関東火山灰層のうち上部層である、いわゆる立川ローム層の最下層の暗色帯下層へ何十cmかくいこんだあたりからこの残積のカロまでの層の中にある何枚かの層準（horizon）は、遺跡の性格のよくわかっていない先縄文プロパーと関係がある。われわれの直接の先祖である縄文式と関係のあるのは、再積のカロすなわちヤロ（やわらかくつまったローム）から上であるが<sup>10)</sup>、この付近ではカロの堆積のみられる高さからは遺跡は発見されていない。遺跡が発見されているのは、図3の T-3、T-4、T-5の海拔250~300mあたりである<sup>11)</sup>。これらの遺跡は、形成年代が弥生式以降と思われる立川段丘よりさらに新しい青柳段丘に対比されている<sup>12)</sup>河岸段丘上で発見されている。その遺物の縄文土器片の量は少量で、すべて円

状度E（well-rounded）の程度に円磨されており、残積のものではなく、段丘より高い山地からの押し出しの堆積と一緒に再積した遺物としなければならない。それら縄文土器の中にはあるいは残存縄文<sup>10)</sup>のものもまじっているかもしれない。

原始神道期かそれに近い時代に沢井の青渭神社の崇敬集団であった当時の集落は、少なくともこれより高いところになくはならないことになるが、それに相当する遺跡は今のところ発見されていない。その集落のはずれぐらいに祭祀対象である惣岳山を拜める位置を求めれば、現在の里宮付近のせまい緩傾斜地か平坦地につめて考えることもできるが、現在の地形では集落ののるような広い地形は見当たらない。ただしこの付近の山地では、先史集落ののるような径100mもある地形が、簡単に数十年で侵食されてしまうことを、あちこちでみてきている。

海水準の上昇・下降と海岸から遠い丘陵地形の侵食・堆積とがかなり細かく関係していることもつかみかけてきている<sup>13)</sup>。縄文~弥生海進の絶頂が海退の相に転じた時に、おそらく多摩川の侵食も活発となり、土砂は下流に運ばれ、下流には米作りのできる低地が広がるようなことがあり、全国的な条里制施行期には深大寺付近にも大きい集落ができ、深大寺の青渭神社が勧請されたものであろう。

もっと下った歴史時代には2つの小海進にとまらう2つの海退の時期があるが<sup>10)</sup>、そういった海退期に下流の汜らん原がはっきりと陸化してできた中世・近世の新しい地形の上に新しい集落ができ、長沼の青渭神社が勧請されたものであろう。

### Ⅴ. 残された問題

古社の歴史を調べていくと、中世修験が神仏混淆によって古社と結びついた頃までは誰がやってもわかるが、われわれが知りたいのはそれ以前のことである。

従来の神道学はおもに神社神道についてであり、

神社の鎮座当初の儀式にまで溯っているいろいろ考へてはいるが、それより古いことも最近の神道考古学の成果からかなりわかるようになって来た<sup>14)</sup>。

古社の古社たりうる理想的な形としては、祭祀対象である特殊な自然物・いわゆる古代祭祀遺跡・中世的な山宮・近世的な里宮などがセットになって残っていることである<sup>15)</sup>。3社ある論社の中で、現在これを正社と考えるより仕方ない沢井の青渭神社について、まだ満たされていない古社としての条件は、付近に原始神道期の遺跡であるいわゆる祭祀遺跡が発見されていないことである。

月に何回、年に何十回と行なわれた祭りの度ごとに、供えたものやお供えに使った器を祭がすんだあとで、人が踏んで粗末にしたりしないような場所、例えば集落のはずれの小さい凹地や川筋に面した斜面などに、ひっそりと埋めたものが祭祀遺跡である。この種のもは径数mといったごく小さいのが普通であるため、毎年かならずある梅雨時の集中豪雨、台風時の大雨などの流水の営力で簡単に再積してしまふ。全国に180ヶ所ぐらゐるこの種の狭義の祭祀遺跡のうち、約100ヶ所は再積のものであることがわかっている<sup>14)</sup>。

残された問題は、沢井の青渭神社に関連する祭祀遺跡をさがすことである。山林、下生え、落葉、積雪、崖堆積物にはばまれ表面採集はきわめて困難である。それでも、山道の切割の大数観察を行なってゆく間に、時には台風や地震による斜面崩壊などもおこるであろうし、気長に頑張って歩きまわるより仕方がない。筆者は年で、間もなく消え去ることであろうが、あとはどうぞみなさんで大いに頑張っていたいただきたい。

(千葉大学名誉教授)

#### 〔注〕

- 1) 菱沼 勇『武蔵国式内社の歴史地理』永晃社、1966、232～238頁。
- 2) 三橋 健「11 青渭神社」(式内社研究会編

『式内社調査報告 第11巻』皇学館大学出版部、1976) 161～169頁。

- 3) 国土地理院『1:10,000地形図 調布』、1985。
- 4) 川崎逸郎「下総台地の先導谷一地形編年の構想一」立正地理学会1958年度研究報告、1958、15～23頁。  
八田明夫・川崎逸郎「飯岡台地の地形学的研究」地学雑誌、92-4、1983、17～31頁。
- 5) 神尾明正「園生(そのう)貝塚の発掘による地形面とその考察」千葉大学文理学部紀要、4-1、1963、79～101頁。
- 6) 神尾明正「武蔵野のくぼ地形」(武蔵野市史編纂委員会『武蔵野市史』、1970) 27～30頁。
- 7) 小沢智生・平 朝彦・小林文夫「西南日本の帯状地質構造はどのようにしてできたか」科学、55-1、1985、4～13頁。
- 8) 高島清行・小池敏夫「関東山地東南部、御前山一五日市地域の中生界の層序と地質構造」横浜国立大学理科紀要、II-31、1984、29～49頁。
- 9) 森谷ひろみ「三宅島式内社に関する歴史地理学的研究—第二報『三宅記』に載る「八王子」の神社について—」千葉大学教養部研究報告、A-7、1974、93～147頁。
- 10) 神尾明正・森谷ひろみ「沖積地質学的仮編年表の修正」千葉大学教養部研究報告、B-5、1972、25～27頁。
- 11) 青梅市教育委員会『青梅市の埋蔵文化財』青梅市郷土博物館、1977、78頁。
- 12) 青梅市教育委員会『青梅市の自然I』青梅市郷土博物館、1981、170頁。
- 13) 神尾明正「海上町の地形について」海上町史研究、28、1987、1～20頁。
- 14) 森谷ひろみ「古代祭祀遺跡の歴史地理学的研究」(『神道考古学講座 第6巻 関係特論』雄山閣、1973) 119～147頁。
- 15) 森谷ひろみ「安房国式内社に関する歴史地理学的研究—第二報 朝夷郡莫越山神社について—」国史学、86、1971、43～63頁。

#### 〔付記〕

本稿は、1986年12月神道宗教学会年大会に於て口頭発表したものに、その後の野外作業で得た結果をふまえて、加筆したものである。

この程度の小論ではあるが、これをものするに当

たっては、地理学の性質上、ここにお名前をあげきれない実に大ぜいの方々のお世話になっている。そ

の思い出は尽きるところを知らない。付記して、深謝の意を表する次第である。